

〈今月の紙面〉

- ・「食料・農業 知っておきたい話」-61- (2面)
- ・富澤さん(群馬)優秀・特別賞 全農酪農経営体験発表会 (3面)
- ・「国産品を選ぶ」依然最多 17年度上半期消費者動向調査 (4面)
- ・促成イチゴ 奇形果の発生抑えるハエ (5面)
- ・乳牛 飼料用イネ5品種の部位別分解に大差 (6面)
- ・子牛・肥育牛 冬季飼養管理のポイント (7面)
- ・畜産物需給見通し (8面)

# 開拓情報

発行所  
 公益社団法人全国開拓振興協会  
 〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13  
 TEL 03-3586-5843  
 FAX 03-3586-5846  
 ホームページ http://www.kaitakusya.or.jp  
 全日本開拓者連盟・全開連・全国開拓振興協会共同編集

## 生乳生産2年連続前年割れ

### 今年度北海道0.5%減、都府県は2.4%減見通し

(一社)Jミルクは9月29日、今年度の生乳・牛乳製品の需給見通しを発表した。7月までの実績データに基づき、今年度の生乳生産量などの予測を発表した。7月までの実績データに基づき、今年度の生乳生産量などの予測を発表した。

2017年度の地域別生乳生産量(見通し) (千トン)

	全 国		北海道		都府県	
	前年比		前年比		前年比	
10月	593	98.8%	320	100.2%	273	97.3%
11月	574	99.1%	307	100.7%	267	97.4%
12月	604	99.0%	324	100.5%	280	97.4%
1月	615	99.4%	329	101.3%	286	97.4%
2月	564	99.6%	300	101.1%	264	98.0%
3月	631	99.5%	334	100.9%	297	98.0%
第1四半期	1,876	98.2%	988	98.0%	888	98.5%
第2四半期	1,787	97.8%	975	98.8%	812	96.7%
第3四半期	1,772	99.0%	951	100.4%	820	97.4%
第4四半期	1,810	99.5%	963	101.1%	847	97.8%
上期	3,663	98.0%	1,963	98.4%	1,700	97.6%
下期	3,582	99.3%	1,914	100.8%	1,668	97.6%
年度計	7,245	98.6%	3,877	99.5%	3,368	97.6%

今年度の生乳生産量は、前年比で2.4%減見通し。北海道は0.5%減、都府県は2.4%減見通し。7月の前回予測より0.2%増、1万3千トンの修正されたが、27千トンの予測。7月は猛暑の影響で前回予測より落ち込んだが、8月は気温が低く予測水準に回復。今後、生産の主力となる2〜4歳の乳用牛頭数が前年度水準に回復することなどから、下期には前年を越える見込みであるものの、通期では前年度をやや下回る見通し。都府県は、同2.4%減の336万8千トンの予測。東日本では連続した

降雨など、冷涼な気候により落ち込みが少なかった。一方、西日本では厳しい暑さや今春の分娩頭数が前年を下回ったことで前回予測より落ち込んだ。下期は都府県全体で前年を下回って推移し、通期で前年度を下回る見通し。牛乳類生産量は、牛乳(牛乳、加工乳、成分調整牛乳、乳飲料)が前年度を0.8%下回り、「はつ酵乳」は引き続き堅調な需要が見込まれるものの、通期では0.3%下回る見込み。都府県の生乳需給は、「生乳供給量」が前年度を2.4%下回る一方で、飲料等向け処理量は比較的堅調な需要が見込まれる。需給は、ひつ迫基調で推移し、北海道から都府県への移入量が42万5千トんと9.5%増加する見込み。

## 事業基盤の再構築を期す

### 全開連17年度事業方針(案)

全開連は10月27日、東京・赤坂の三栄堂ビル石垣記念ホールで第69回通常総会を開催する。提出議案は、第1号議案(第69(平成28)年度事業報告、貸借対照表、損益計算書、注記表、剰余金処分(案)及び附属明細書承認について、第2号議案(第70(平成29)年度事業計画設定について

見聴取が行われた。第70年度事業では、第9次中期3カ年計画の最終年として、引き続き、購販事業基盤の再構築を進め、経営体制の強化に取り組むとしている。事業計画案における基本方針は次のとおり。

### 基本方針

開拓地における酪農・畜産事業は、日本国民に

第9次中期3カ年計画の最終年に当たり、引き続きの重点事項に基づき、購販事業基盤の再構築と事業の効率的な運営を進め、経営体制の強

化に取り組みます。 (1)会員と一体となった専門農協としての強固な組織づくり (2)生産性向上のための目標に沿った経営・技術指導の実施 (3)低廉・良質な生産資材の開発と供給 (4)部分肉の海外輸出など、将来を見据えた販売体制の強化 (5)業務の効率化による経営体制の改善 (6)会員との事務処理の共同化による事務処理の合理化

本紙は無償で提供しています。ご希望の方はお知らせ下さい。

## 新たな原産地表示開始

### 全加工食品に義務化

食品表示基準の一部を改正する内閣府令が9月

1日に公布・施行され、加工食品の新たな原料原産地表示制度が始まった。国産農畜産物の消費拡大などが目的。国内で製造された全加工食品を対象に、製品に占める重量割合1位の原材料について、原産地の表示を義務付けた。

原材料が国産品なら「国産」と、輸入品なら原産国名を表示する。産地が複数の場合は、原則重量割合順に国名を表示する(国別重量順表示)。

3カ国以上ある場合、3カ国目以降は、「その他」とまとめて表示することができる(A国、B国、その他)。

消費者庁が今年3月に示した基準改正案は見直された。事業者の表示切り替えの準備及び消費者

への普及・啓発のための経過措置期間を2年延長し、施行日から4年半とされた。新表示基準は22(平成34)年4月1日に完全施行される。

ただ、原産国や重量割合が頻りに変わるなど、国別重量順の表示が困難な食品については、例外を認めている。過去の使用実績の付記や根拠書類の保管などを条件に、「A国またはB国」(または「国産」)の表示は、3カ国以上の外国産と国産が混じる場合の「輸入または国産」(大括弧表示)または表示(大括弧表示)もできる。



## 欧州3カ国研修事業参加一行が無事帰国

全国開拓振興協会の17年度海外研修事業参加者一行(団長川村昭市薩州開拓農協筆頭理事)が、9月24日午後3時過ぎ、羽田空港に着。訪問先欧州での8日間の研修日程を終え、無事帰国した。開拓者・後継者の国際感覚の醸成と、開拓者・農家の経営向上に資することを目的に実施する海外研修事業。今年度は、EU(欧州連合)で農業が盛んな3カ国(ドイツ連邦共和国、オランダ、フランス共和国)の農畜産業事情を視察調査した。参加者は、北海道、岩手、栃木、長崎、宮崎、近郊の野菜農家にて(138万7千ト)を1万7千ト、さらに生産を減らす自主的取組参考値(138万4千ト)を1万3千ト下回り、3年連続で超過作付が解消された。

鹿兒島の開拓関係者に、事務局員を加えた14名。一行は、最初にドイツに入り、農協協会農業者・消費者などで構成)でセミナーを受講。肉用牛農場や中央卸売市場(野菜・果樹)を視察した。3日目、オランダに移動し、チーズ農家や酪農研究機関を視察。5日目は、フランスに移動し、総合市場(野菜・果樹・花き・食肉)や野菜・果樹農家などを視察した。

17年度産米、3年連続で超過作付解消。農水省は9月29日、17年度産の主食用米や飼料用米などの戦略作物等の作付状況(9月15日現在)を取りまとめた。17年度産の全国主食用米の作付面積は、飼料用米などへの転換が進んだことから、16年度に比べ1万1千ト増え、9万2千ト増え、WCS用稲は2千ト増え、4万3千ト増えた。

全国の生産数量目標をつた。

各産地で主食用米から戦略作物等への転換が引き続き進み、多くの作物で作付面積が増加している。飼料用米の作付面積は1千ト増え、9万2千ト増え、WCS用稲は2千ト増え、4万3千ト増えた。

全国的な生産数量目標をつた。

本紙は無償で提供しています。ご希望の方はお知らせ下さい。



食料・農業 知っておきたい話 第61回

付度の競争政策と公取の尊厳は何処に

東京大学教授 鈴木宣弘氏



14年12月14日の衆院選で、福井県農政連は苦渋の選択で与党候補を遅れ

農業協同組合(以下「農協」)に対して独占禁止法(以下「独禁法」)の適用除外をやるべきとの議論はかなり前からあったが、近年、農協改革という名目の農協解体が

これらは、いずれも農協の共同販売(以下「共販」)行為自体に対する独禁法適用ではなかったが、極めてわかりやすい

「買いたたき」の強化が真の狙い。ここで、必要となるのが、不当な価格引き上げ

この考え方は日本でも同じであり、前記の「2」一定の取引分野における競争を事実的に制限する

「見せしめ」「脅し」としての競争政策の政治利用。2013年1月25日の参院選で、山形県農政連は初めて野党候補を推薦

「見せしめ」と「脅し」に、本来、政治から独立した司法機関である公取が政治の手足となること

適用除外のなし崩し化、「共販を認めつつフリーライドを推奨して共販を崩す」論理破綻

「見せしめ」と「脅し」に、本来、政治から独立した司法機関である公取が政治の手足となること

「買いたたき」の強化が真の狙い。ここで、必要となるのが、不当な価格引き上げ

この考え方は日本でも同じであり、前記の「2」一定の取引分野における競争を事実的に制限する

「見せしめ」と「脅し」としての競争政策の政治利用。2013年1月25日の参院選で、山形県農政連は初めて野党候補を推薦

「見せしめ」と「脅し」に、本来、政治から独立した司法機関である公取が政治の手足となること

図 49歳以下の新規就農者数の推移(就農形態別)

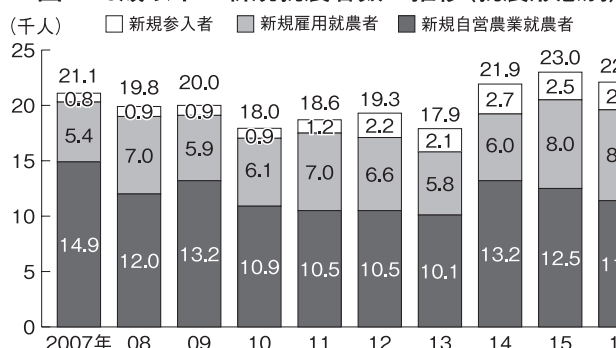


表 新規雇用就農者数

Table with columns for year, total, and gender breakdown (male/female) for new hired agricultural workers. Includes growth rates and composition percentages.

農水省はこのほど、16年新規就農者調査(17年2月1日現在)の結果を発表した。新規就農者は6万1500人で、前年に比べ7.5割減少したが、2年連続で6万人を超えた。うち49歳以下は2万2050人(全体の36.7%)で、4.3割減少したが、3年連続で2万人を超え、調査開始07年以降で前年に次いで2番目に多かった(図)。

新規就農者を性別にみると、男性1万5190人で、前年に比べそれぞれ8.6%、4.1%減少。49歳以下は、男1万6040人、女6020人で、それぞれ2.4%増加。それぞれ5.4%、1.0%減少した。

16年新規就農者調査 49歳以下 3年連続2万人超 雇用就農者が2.4%増

と、男4万4960人に従事することになった。新規雇用就農者は1万6800人、うち49歳以下は8170人で、それぞれ2.4%増加。非農家出身が9270人で、86.8%を占めた。新規学卒就農者は1830人(農家270人、非農家1560人)で、11.2%減少した。







# 「国産品を選ぶ」依然最多

## 17年度上半期 消費者動向調査

日本公庫

（株）日本政策金融公庫は、このほど、「17年度上半期消費者動向調査」の結果を発表した。全国の20代～70代の男女2000人（各1000人）に調査したところ、「国産品を選ぶ」人が最も多かった。このほか、「健康志向」が強く、「安全志向」も高かった。

「国産品を選ぶ」人が最も多かった。このほか、「健康志向」が強く、「安全志向」も高かった。消費者の現在の食に対する志向について聞いたところ、「健康志向」44.8%、「安全志向」31.4%、「経済性志向」17.6%、「簡便化志向」17.6%、「気にかける」79.2%だった。

「赤身肉を購入する頻度」が最も高かった。牛肉は「年に数回」31.1%、「月に数回」27.5%、「ほとんど食べない」29.0%と続いた。一方、交雑種は「ほとんど食べない」58.1%でトップ。次いで「月に数回」18.8%、「年に数回」17.0%の順となった。

「赤身肉と霜降り肉の購入頻度」が最も高かった。牛肉、輸入牛肉は「現在の価格が妥当」が5割を超え、「値下げ」は4割を超え、「値上げ」は1割未満だった。

「赤身肉と霜降り肉の購入頻度」が最も高かった。牛肉、輸入牛肉は「現在の価格が妥当」が5割を超え、「値下げ」は4割を超え、「値上げ」は1割未満だった。

## 白もの 飲用頻度2年連続増 最高は男子中学生1日平均292ml

農畜産業振興機構は、このほど、「16年度牛乳・乳製品の消費動向に関する調査」の報告書を公表した。全国の12～70歳以上の男女2664人（各1332人）に調査したところ、牛乳類の飲用頻度が前年度より増加した。特に男女ともに60～70代以上の層に多く飲まれており、1日当たりでは、200mlを飲む割合が高かった。

「赤身肉と霜降り肉の購入頻度」が最も高かった。牛肉、輸入牛肉は「現在の価格が妥当」が5割を超え、「値下げ」は4割を超え、「値上げ」は1割未満だった。

図1 国産食品の輸入食品に対する価格許容度 (単位: %)

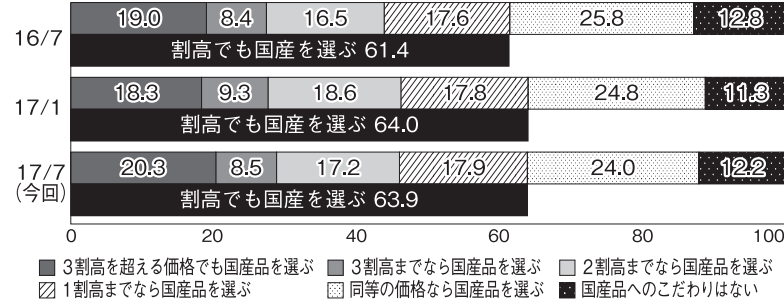
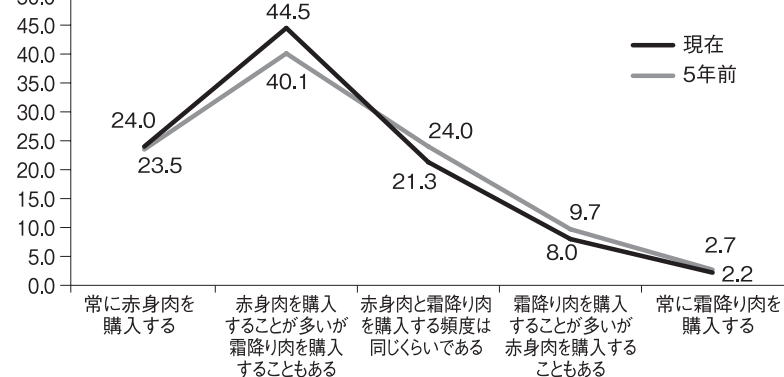


図2 赤身肉と霜降り肉の購入頻度



「赤身肉と霜降り肉の購入頻度」が最も高かった。牛肉、輸入牛肉は「現在の価格が妥当」が5割を超え、「値下げ」は4割を超え、「値上げ」は1割未満だった。

図 性・年代別 白もの牛乳類を飲む頻度 (%)

性別	年代	飲む頻度 (%)						
		毎日	週に5~6日	週に3~4日	週に1~2日	月に2~3日	それ以下	全く飲まない
全体 (2664)		32.7	11.6	14.8	14.5	8.2	7.1	11.1
男性	中学生	43.3	25.6	16.1	6.7	5.6	1.1	1.1
	10代 (中学生除く)	30.7	17.3	14.0	13.3	11.3	5.3	38.0
女性	20代	20.2	12.1	17.3	21.4	33.7	6.4	13.9
	30代	28.8	10.5	15.7	10.5	11.1	11.1	12.4
	40代	22.5	7.9	12.9	14.6	11.2	11.2	19.7
	50代	26.0	6.5	13.0	16.2	11.0	13.0	14.3
	60代	32.6	8.6	10.9	22.3	7.4	5.7	12.6
	70代以上	48.1	7.6	12.7	9.5	3.2	5.7	13.3
中学生	10代 (中学生除く)	24.0	7.0	14.6	22.2	11.1	5.8	15.2
	20代	21.8	5.1	21.2	15.4	12.8	15.4	8.3
	30代	36.0	10.1	13.5	16.9	7.9	6.7	9.0
	40代	42.7	8.3	14.6	10.8	7.0	2.5	14.0
	50代	36.4	10.8	14.2	17.0	7.4	6.8	7.4
	60代	32.7	7.9	20.6	14.5	9.1	9.1	6.1
70代以上	44.6	7.4	15.4	10.3	5.7	6.3	10.3	

※農畜産業振興機構の資料を基に作成。

「赤身肉と霜降り肉の購入頻度」が最も高かった。牛肉、輸入牛肉は「現在の価格が妥当」が5割を超え、「値下げ」は4割を超え、「値上げ」は1割未満だった。

## 農水省はこのほど、「16年度農作物作付(栽培)延べ面積及び耕地利用率」を公表した。

全国の田畑の農作物作付(栽培)延べ面積は、410万2千ヘクタールで、前年並みとなった。耕地利用率は91.7%で、前年並みとなった。水稲(子実用)などの作付面積が減少したものの、飼料作物、雑穀(乾燥子実)などの作付面積が増加した。中国0.4%、それぞれ減少した。

「赤身肉と霜降り肉の購入頻度」が最も高かった。牛肉、輸入牛肉は「現在の価格が妥当」が5割を超え、「値下げ」は4割を超え、「値上げ」は1割未満だった。

「赤身肉と霜降り肉の購入頻度」が最も高かった。牛肉、輸入牛肉は「現在の価格が妥当」が5割を超え、「値下げ」は4割を超え、「値上げ」は1割未満だった。

「赤身肉と霜降り肉の購入頻度」が最も高かった。牛肉、輸入牛肉は「現在の価格が妥当」が5割を超え、「値下げ」は4割を超え、「値上げ」は1割未満だった。

「赤身肉と霜降り肉の購入頻度」が最も高かった。牛肉、輸入牛肉は「現在の価格が妥当」が5割を超え、「値下げ」は4割を超え、「値上げ」は1割未満だった。



### 奈良県農業研究開発センター

## 促成イチゴ 奇形果の発生抑えるハエ

### 最新技術 ミツバチの代替として期待

冬季の日照不足や低温はセイヨウミツバチの活動を制限し、イチゴ促成栽培では受粉不良による奇形果発生の要因の1つとなっている。奇形果は、商品価値の低下につながる。

奈良県農業研究開発センターは、冬季イチゴ促成栽培において、糖尿病などで壊死した部分の治療(マゴットセラピー)に使われるヒロズキンバエ(以下、ハエ)に注目して、セイヨウミツバチ(以下、ハチ)の代わりにするかを検討した。ハエは、日本に広く分布しており、ハチに比べて10~35℃の広温域で利用可能。また、紫外線がなくても活動でき、ハチと異なり作業者を刺す心配がない。

イチゴ10品種を混植した1.3aの無

加温ハウスで試験を行った。13年10月25日の開花初期からほぼ7日間隔で、1回当たりプラスチック容器に入れたハエの蛹(300匹)を放飼。一方のハウスは、10月26日に巣枠5枚のハチの巣箱を設置。供試株数は1品種当たり32株、栽植間隔は畝幅120cm・株間23cm・2条千鳥植えとした。12月~14年4月に収穫を行った。果托の一部が肥大化していないものを奇形果とした。

試験の結果、いずれの品種でもハエ利用ハウスが奇形果数率・重率ともにハチ利用より小さく、奇形果の発生が抑えられた(表)。また、品種により多少傾向が異なるものの、おおむね同等の収穫量となった。ハエが特定の品種にだけ訪果することは、認められな

表 花粉媒介昆虫の違いがイチゴの収穫量<sup>2</sup>と奇形果率<sup>1</sup>に及ぼす影響

品 種	花粉媒介昆虫	収穫果数(果/株)	収穫果重(g/株)	奇形果数率(%)	奇形果量率(%)
アスカルビー	ヒロズキンバエ	51.0	695	15.6	15.1
	セイヨウミツバチ	44.7	706	33.4	25.4
女 峰	ヒロズキンバエ	77.2	681	17.9	18.3
	セイヨウミツバチ	75.5	772	43.4	35.5
さ ち の か	ヒロズキンバエ	33.3	421	5.0	2.1
	セイヨウミツバチ	38.8	459	51.4	37.2
ゆ め の か	ヒロズキンバエ	55.3	744	6.3	2.8
	セイヨウミツバチ	54.6	776	30.8	17.4

<sup>2</sup> 収穫期間は13年12月~14年4月16日。

<sup>1</sup> 奇形果は受精不良により果托の一部が肥大していない果実。

※奈良県農業研究開発センターの資料を基に作成。10品種中4品種の結果を掲載。

かった。

同センターは、イチゴ促成栽培でハチの代わりとしてハエが利用可能だとした。また、蛹1個当たり1.5円、投入個数を300個、頻度を10日間隔、期間を150日間として、導入費用を1a当たり6750円と試算している。ハチの巣箱1つの価格は約2万5000円。3a程度の小規模ハウスの場合、ハエの導入費用が2万2500円なので、コストはハチと同等以下に抑えられるとした。大規模ハウスではコストが高くなると考えられるため、ハチが活動しにくい時期を狙

い、補完的にハエを投入する利用法も検討している。

日照不足地域のハウス以外にも、近辺で冬季のせん定枝焼却による煙が発生しているハウス、燃烧型炭酸ガス発生機を用いた高濃度施用や紫外線カットフィルム展張をしているハウスなど、ハチの活動が制限される場での利用も考えられている。

今後、生研支援センターの支援を受けて、農研機構等と共同でさらなる研究を進め、詳しい利用マニュアルの作成を目指している。

## トマト・キュウリ 十分な換気で防除

### 多湿で発生する病害

「トマト灰色かび病」と「キュウリべと病」は、糸状菌(カビ)が原因で起こり、商品価値の低下を招く。

秋口からハウス栽培で発生が多くなるため、防除のポイントを紹介する。

#### トマト灰色かび病

果実、花、茎、葉などのあらゆる組織に発病し、特に果実の被害が大きい。摘心部位・葉かき痕などの傷痕や壊死部位から侵入する。茎から感染すると、

上部の枯死を招き収量減少につながる。枯死しない場合でも、果実に感染すれば表面に白いリング状の斑点(ゴーストスポット)が現れ、腐敗果にはならないが商品価値は低下する。

気温20℃前後と多湿(湿度90%以上)が続くと発病が著しくなるため、密閉しがちなハウスは注意が必要。11~4月にかけて特に発生しやすい。

防除のポイントは、以下のとおり。  
①発病した部位が伝染源となるため、

早急に取り除き、ほ場外へ持ち出して処分する。②わき芽かきを行い、通気性を良くする。サイドビニール被覆をしていると、風通しが悪くなるため管理に注意。ハウス内が多湿にならないよう暖房機や送風を利用して湿度の低下に努める。③薬剤防除は、発生初期に徹底して行う。耐性菌の発現を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、系統の異なる薬剤をローテーションで使う。

#### キュウリべと病

葉のみに発生し、病気が進むと全体が黄褐色となり枯死する。激しく発病した葉は枯れてもろくなり、下葉から

枯れ上がる。多発生すると枯死する葉が多くなることから、果実の収量や品質が低下する。

気温20~24℃、葉が濡れるような多湿条件で発生しやすい。

防除のポイントは、トマト灰色かび病の①、③に加えて、以下のとおり。

①強度の摘心、着果過多、肥料切れなどによる草勢低下は発病を助長するので適正な栽培管理を行い、草勢の維持に努める。②密植、過繁茂、換気不足の場合に発生しやすいので、通風を心がけ多湿にならないように管理する。③夜間の温度が10℃以下になると、被害が著しくなるので夜温管理に注意する。

## 病害や生育不良の発生が増加

### 16年 地球温暖化影響等調査

農水省はこのほど、16年地球温暖化影響調査の結果を公表した。同調査は、各都道府県から寄せられた地球温暖化の影響と思われる農作物の高温障害などやその対策事例をまとめたもの。

トマトは、着果不良や生育不良の報告がそれぞれ18県、5県からあり、件数で前年を上回った。対策では、細霧冷房の導入や遮光・遮熱資材の導入などが報告された。実施に当たり、設備や電気代などのコストと品質向上による経済性の考慮、資材は遮光強度や天候によってはマイナスの効果が生じる点等の課題が挙げられている。

イチゴは、花芽分化の遅れや炭そ病の多発、着果不良の報告がそれぞれ10県、3県、3県からあり、件数で前年

を上回った。対策では、株元冷却などが報告された。株元冷却時、チューブにできる結露により、病害の発生が助長されたという事例が課題として挙げられている。

ハウレンソウ及びネギはともに、生育不良、病虫害多発の報告がそれぞれ14県、8県からあった。特にネギでは、平年より発生割合が高いという報告が複数挙げられている。

温州ミカン、年間を通して高温傾向が続いたことに加え、西日本における9~10月の多雨の影響により、浮皮や着色不良・遅延、日焼け果の報告がそれぞれ14県、6県、5県からあり、件数で前年を上回った。対策では、成長調整剤の散布やマルチ栽培の導入な

どが報告された。成長調整剤の散布は浮皮の発生抑制に効果がある一方で、着色遅延などの要因となる危険性、マルチ栽培では導入コスト・被覆労力(特に傾斜地等)を要することが課題として挙げられている。

リンゴは、果実肥大期~着色期の7~10月に全国的に平年を上回る高温で推移したことにより、着色不良・遅延や日焼け果の報告がそれぞれ8県、6県からあった。着色優良系統の導入など対策が挙げられたものの、永年性作物のため品目・品種転換は計画的に進める必要がある。

茶は、生育障害や凍霜害の発生の報告がそれぞれ8県、4県からあった。

なお、報告の中には現時点で必ずしも地球温暖化の影響と断定できないものもある。将来、地球温暖化が進行した場合、これらの影響が頻発する可能性があることから取り上げている。

## ニホンジカ、初の減少

### 15年度調査より

環境省はこのほど、全国のニホンジカ及びイノシシの個体数推定結果を公表した。鳥獣の管理目標を明らかにするために進めているもの。15年度末時点で、ニホンジカは約304万頭、イノシシは約94万頭となった。

15年度の捕獲数などから推定した数値。ニホンジカは、調査開始の89年度から増え続けてきたが、初めて減少に転じた。イノシシは、減少傾向となっている。

同省は、この結果からニホンジカ個体数の将来予測を立てた。15年度の捕獲ペースが続いた場合、23年度には約359万頭に達する見込み。減少を維持するためには、捕獲ペースの向上が必要だとしている。



## 千葉県畜産総合研究センター

乳牛 穂重型 早刈りで高消化性  
飼料用イネ5品種の部位別分解に大差

イネWCS（ホールクロップサイレージ）の収穫時期は、TDN収量が高い上に良質発酵が得られやすい黄熟期が適切とされてきた。だが、泌乳牛にとっては粗の消化性が低い。

千葉県畜産総合研究センターは、5品種の飼料用イネを使い、早刈りが泌乳牛の消化性に影響があるかを飼料成分の分析法（酵素または試薬を用いて、牛による消化性を推定する分析法）により部位別に調査した。

## 試験

供試品種は、「夢あおば」「ホシアオバ」「たちすがた」「モミロマン」「リーフスター」の5品種。対照として食用1品種「ちば28号」（「ふさこがね」の飼料向け品種名。コシヒカリより背が低く倒れにくい特徴）。2年間（11～12年）の試験。ただし、「たちすがた」は12年のみ。刈取りは、出穂期と以降10日ごとに60日後まで計7回実施。刈り取った後、茎葉部と穂部に分けてそれぞれの収量と水分含量を測定した。消化性では、泌乳牛向けを想定して部位別に分析。酵素法と

デタージェント法により分析し、すべて乾物中の%で算出した。

## 結果

部位別の収量性は、出穂以降、いずれの品種も増収するのは穂部で、茎葉部は増減が少なく推移した。茎葉型（「リーフスター」「たちすがた」）は、穂重型（「夢あおば」「ホシアオバ」「モミロマン」）に比べ、茎葉部の収量水準が高かった。部位別水分含量をみると、出穂後の茎葉部の水分変動は小さく、穂部は登熟にともない低下が著しかった。全草（茎葉部+穂部）でサイレージ調製に適する水分含量であるおおむね65%になるのは、「夢あおば」「たちすがた」「リーフスター」「ちば28号」で出穂10日後の乳熟期程度。それ以外では、穂重型の「ホシアオバ」「モミロマン」で出穂20日後の糊熟期程度だった。

消化性は、全草では登熟が進むにつれ、OCC（たん白質、デンプンなどの消化され

やすい成分）が増加。また、消化性の低いOb（低消化性繊維）が減少していく傾向みられた。穂部のみでは、登熟が進むとより顕著にOCCが増加し、Obが減少した。一方、茎葉部では穂部と異なり変化が小さかった。

茎葉部の経時的変化をみると、「たちすがた」「リーフスター」は多少の振れ幅はあるものの、OCC及びObはほぼ横ばい。「リーフスター」は、登熟が進み出穂後40日経過しても、OCCとOa（高消化繊維）の合計が約30%台で、ほかの品種と比べて高い消化性を維持した。茎葉型品種に比べ、穂重型の「ホシアオバ」「モミロマン」の茎葉部では、経時的なOCC増加とOb減少の傾向が認められた。

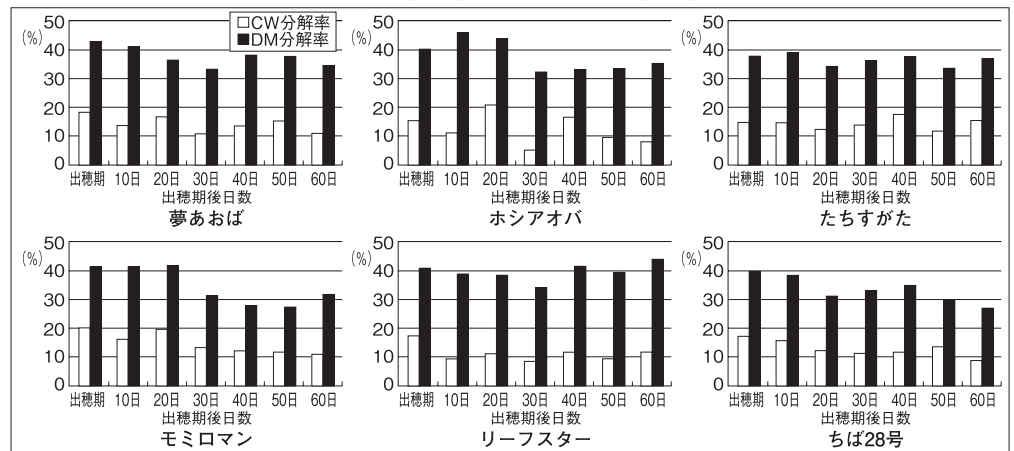
全草のCW（総繊維）分解率及びDM（乾物）分解率をみると、おおむね出穂

後30日以上経過した黄熟期以降で、CW分解率が低下、DM分解率が増加の傾向であった。また、茎葉部のみでのCW分解率をみると、特に穂重型は、早刈りで高い傾向がみられた（図）。DM分解率も同様の傾向だった。

以上より、サイレージ発酵に影響を与える水分含量を考慮し、穂重型は出穂20日後の糊熟期以降、茎葉型品種は出穂10日後の乳熟期以降の収穫が良いと考えられる。また、茎葉部の利用に価値を置く場合、茎葉の収量性は乳熟期～糊熟期程度に早刈りしても黄熟期刈りと比べて劣ることはなかった。

同センターは、収量性・水分含量・消化性の面から、泌乳牛向けは乳熟期まで早めることができ、茎葉型と穂重型の品種特性に留意しつつ乳熟期～黄熟期の範囲を収穫時期とした。

図 茎葉部の総繊維(CW)分解率と乾物(DM)分解率の推移



## 畜産 農家の広域連携必要

## 全国SGS利用実態等調査

国産飼料生産は盛んになりつつあるが、大家畜における飼料米の利用は依然として少ない。

農畜産業振興機構は、東京農業大学教授・堀田和彦氏の調査・報告「ソフトグレインサイレージの利用実態と今後の可能性～大家畜生産地域の事例をもとに～」を公表した。飼料米、ソフトグレインサイレージ（以下、SGS）の現状では、飼料米の生産が少ないことなどを課題とし、稲作・畜産農家の連携促進が重要とした。

各都道府県の畜産課にアンケートを実施（回答33都道府県、回収率70%）した。アンケート項目は、飼料米、SGSの生産実態、SGSとしての飼料

化の現状・問題点及びSGS拡大のための支援方策など。

SGS用の飼料米の生産実態を聞いたところ、現在、現場に広く普及しているところは少ないが、山形、青森、秋田、北海道、静岡、熊本などが比較的盛んな地域で、生産面積が10～100ha以上となっている。これらの地域では、すでに実証試験段階を終え、現場にSGSがある程度定着していることが分かっている。そのほかの地域では、生産しているものの、5ha未満と小規模となっている。

飼料米の現状の課題についての割合（「非常にそう思う」「ややそう思う」「そう思う」の合計）をみると、「転

表 ソフトグレインサイレージの現状・問題点について

(単位：%)

	非常にそう思う	ややそう思う	そう思う	あまり思わない	まったく思わない
SGSを引き受ける施設・組織がない	0.0	12.1	24.2	30.3	27.3
畜産農家は飼料変更に慎重	0.0	12.1	24.2	51.5	6.1
そもそも畜産農家がSGSを知らない	3.0	15.2	21.2	48.5	9.1
畜産農家高齢化、餌の変更できない	3.0	18.2	18.2	48.5	6.1
助成金の継続が不透明で畜産農家がSGSに踏み切れない	12.1	48.5	18.2	12.1	0.0
飼料米の生産が少なく、畜産農家がSGSに変更できない	15.2	57.6	6.1	9.1	3.0

※農畜産業振興機構・畜産の情報9月号「ソフトグレインサイレージの利用実態と今後の可能性～大家畜生産地域の事例をもとに～」に掲載されている表2を使用（アンケート項目部分を再編集）。

作用用途が明確で飼料米を増加する余地がない」がもっとも高く87.8%。次いで「主食用のコメを作りたい農家が多い」84.9%、「利用する畜産農家が見当たらない」78.8%となった。飼料米のSGSとしての利用技術が後発である点、主食用のコメとして生産したい農家が多い点などが多くの地域で課題となっていること等が明らかになった。

SGSの現状・問題点についての割合（同）をみると、「飼料米の生産が少なく、畜産農家がSGSに変更できない」がもっとも高く78.9%。次いで「助成金の継続が不透明で畜産農家がSGSに踏み切れない」78.8%と上位2項目は僅差だった（表）。普及・拡大では、「SGS用飼料米へ的高額な

助成金に対して、畜産農家はその継続性を不安視し、SGSに踏み切れない」「現在、飼料米の生産が少ないため、畜産農家がSGSに変更できない」などの回答が多かった。

SGS拡大のために必要な施策の割合（同）をみると、「県域を超えたネットワークの促進」がもっとも高く72.7%。「SGS由来畜産物の消費者への認知促進」60.6%、次いで「SGSの試験段階からの普及」「SGS施設・受託組織の形成促進」がともに42.4%だった。畜産農家と稲作農家には、県域を越えた広い連携が求められており、飼料米を給与した畜産物に対する消費者の評価を高め、SGS利活用拡大の必要性を全国の畜産担当者が感じているとうかがえた。

ワクチン接種を  
牛コロナウイルス病に注意

同病は、主に下痢や呼吸器症状を招く。牛群全体に拡大しないよう、早めの予防が必要になる。

子牛は年間を通じて発症するが、特に寒冷期に好発する。重症になると、脱水症状で死亡することがある。

成牛では、急激な寒さや著しい気温の変化などのストレスを感じた時に好発する。死亡率は0～2%と低

いがまん延する。搾乳牛では、急速な乳量低下をとまらう。

予防は、寒冷期前にワクチンを適切に接種することで、発症を抑制、症状が軽減される。また、清潔な環境、十分な給水、ビタミンなどを与えてストレス緩和に努める。子牛には、寒さから守る対策を行う。

同病は、主に経口して感染する。牛舎内外の清掃と消毒を徹底する。畜舎に入る時は汚れた衣服は着替え、長靴を洗浄消毒する。



# こまめな敷料交換で体温低下防止

## 子牛・肥育牛 冬季飼養管理のポイント

冬季の牛の飼養管理が不十分な場合、疾病などのリスクが高まる。特に子牛は、寒さに影響を受け易く、下痢や風邪にかかりやすい。季節の変わり目から、早めに対策を行うことが重要。寒冷による損耗を低減するため、各県の対策からポイントを紹介する。

### 共通対策

○敷料の交換はこまめに

敷料が水や尿などで濡れていると冷えやすくなるため、おがくず等の敷料をこまめに交換し、多めに敷く。排せつ物の搬出頻度も増やし、床が乾燥している状態を保つ。

○風を直接当てないように

すきま風が入らないよう、すきまを板、コンパネ及びビニールシートなどで覆う。屋根に断熱シートなどを使うことでさらに保温効果が高まる。

○飲水量の低下に注意を

冷水の給与や水槽の凍結は、飲水量

の低下を招く。子牛には、温水給与によって飲みやすい環境を作る。凍結しそうな水道管などは、布や保温資材で被覆しておく。

○早めの雪囲いを

降雪地域では、早めに雪囲いをして備える。

### 子牛

体表面からの熱発散が多く、第一胃が未発達なため発酵熱の発生量が小さい。皮下脂肪も少ないため、特に体温の低下には注意が必要。体温が奪われる状況は主に、冷たいコンクリート床や濡れた敷料に触れた時、身体が濡れた際の水の蒸発時など。

カーフジャケットやネックウォーマーなど(手作りのものでも可)を着せることで保温効果が高まる。ヒーターや湯たんぽも効果的。カーフハッチは南向きにして、入り口をシートで覆う。哺乳牛は、代用乳量を約1割増やし、

# 日頃の衛生管理が重要

## RSウイルス病の予防

牛呼吸器複合感染症(BRDC)は、ウイルスや細菌など様々な病原体が絡み合って発症する。その中で、牛RSウイルス病は、単独でも集団発生することがある。

同病は、呼吸器症状と40~42℃の発熱が長期間持続する。発症から2週間程度で回復することもあるが、重度の肺炎で死亡に至る場合もある。潜伏期間は2~8日で、咳や鼻汁などの飛沫によって感染が拡大。伝播スピードが速く、数日で牛舎内にまん延することもある。

季節に関係なく発生するが、特に

寒暖差が激しく、免疫力の低下しやすい冬季に多くなる。子牛は、輸送、群の再編及び密飼いなどのストレスが溜まりやすい状況で感染リスクが高まる。対症療法が中心で、有効な治療薬はない。

ワクチン接種による予防が確実。さらに、日頃の衛生管理によって外からウイルスを持ち込ませず、感染を抑えることも重要。農場出入りに消毒槽を設置するなどして、日々の防疫を徹底する。また、寒冷ストレスに注意しながら、日中に適切な換気を行い良好な飼養環境を保つことも大切となる。

状態によっては離乳も1週間程度遅らせる。また、夏季よりやや高め(約50℃)の温度で溶かす。

呼吸器病が発症しやすいため、群飼時には、密度を適正にして飼養する。

### 肥育牛

飲水量が低下すると、尿石症を発症

するリスクが高まるので、飲水管理が重要。また、畜舎を密閉し続けると、有毒ガス(アンモニア)やほこりが蓄積して疾病の原因となる。暖かく晴れた日中に換気や採光を行うことで、寒暖差のストレスを軽減しつつ、十分な換気と保温に努める。

## ネットなどで侵入阻止

### 牛舎のカラス対策

牛舎内外に飛来するカラスは、飼料の盗食、ふんによる汚染、子牛への攻撃(つつかれ)などの被害を及ぼす。

特に、飼料にふんが混入すると伝染病の原因となることがあるため、侵入を防ぎ、牛・飼料と接触させないことが重要となる。

### 侵入防止方法

牛舎の出入り口を防鳥ネットで覆ったり、上部からノレン状の物を下げるなどが効果的。牛舎窓なども覆う。

小さなネットの隙間からでも侵入するので、隙間を作らず、開けたままにしないなど、日頃から注意する。ネッ

ト下部の隙間には、鎖などを取り付けて、容易にめくることができないようにすると良い。また、ネットに破れがないか頻りにチェックする。

体が大きく、飛行の小回りが効かないため、テグス(釣り糸)やワイヤーなどの物理的な障害物も有効。テグスなどは、窓から少し離して5cm程度の間隔で張ると効果が期待できる。

観血去勢後の睾丸、生ゴミなどを放置することは、血や肉の味を覚えさせて呼び寄せる。興味を持つような物を発見した場合、早々に撤去する。

## 牛マルキン17年8月分 交雑種・乳用種で連続発動

農畜産業振興機構は、17年8月分の肉用牛肥育経営安定特別対策(牛マルキン)事業の補てん金単価(概算払)を公表した。交雑種と乳用種で補てんが行われる。

1頭当たり補てん金単価は、交雑種が7万7200円、乳用種が4万2100円と両品種とも増加した。前月と比べて、交雑種で1万6500円増、乳用種で6000円増となった。

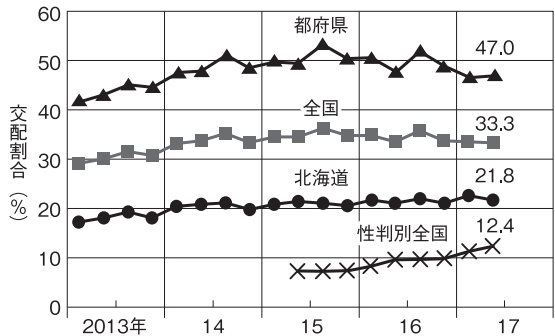
## 北海道10期連続20%超

### 乳用牛への黒毛和種交配率

(一社)日本家畜人工授精師協会はこのほど、「乳用牛への黒毛和種の交配状況(17年4~6月)」を公表した。黒毛和種を交配した割合は、全国平均で33.3%(前期比0.2%減、前年同期比0.1%増)となった。

延べ人工授精頭数の約8割を占める北海道の黒毛和種交配率は、21.8%(同0.7%減、同0.8%減)で、10期連続の20%超え。都府県は、47.0%(同0.5%増、同0.7%減)と、3期ぶりで増加に転じた。都府県を地域別にみると、中四国を除く地域で前期より増加または微増となった。前年同期比では、関東のみ増加した。

乳用牛への黒毛和種精液及び性別別精液の交配状況



延べ人工授精頭数は、北海道で24万3768頭(同1.7%増、同0.8%減)。都府県では5万6472頭(同8.4%減、同3.5%増)となった。前期より、北海道は増えたものの、都府県では大きく落ち込んだ。

性別別精液利用の割合は、全国で12.4%(同0.9%増、同2.7%増)と、増加が続いた。

## 鳥インフルエンザ嚴重警戒を

### 渡り鳥の飛来シーズン入り

農水省は9月12日、都道府県知事あてに高病原性鳥インフルエンザ防疫対策の強化について通達した。

16年度は、9道県、12農場(約166.7万羽)で発生。通達では、最近の中国での発生状況などから、今秋以降の同病ウイルスの日本への侵入リスクは高く、嚴重な警戒が必要であることを強調している。

渡り鳥の本格的な飛来シーズンを迎えるにあたり、発生予防対策及び万一の発生に備えたまん延防止対策に万全を期し、①家きんの飼養農場における飼養衛生管理の確認及び指導②人・車両、野鳥を含む野生動物を介したウイルスの農場内及び家きん舎内への侵入

防止③早期発見・早期通報の徹底などの実施を要請した。

①では、家きん飼養農場の立ち入り検査により、飼養衛生管理基準の遵守状況を確認し、適切な指導をすること。②では、①の機会も活用し、改めて、飼養農場に情報提供及び指導または助言を実施すること。③では、飼養者に症状を示している家きんを発見した時は遅滞なく家畜保健衛生所に通報するよう、指導すること。また、同病にかかった家きんの死亡羽数の増加が比較的緩やかな場合もあることを踏まえ、産卵率の低下や元気喪失といった異状がみられた場合の早期通報の徹底を周知することを求めている。



# 畜産物需給見通し

## 牛枝肉

和牛引き合い強まり、交雑種も連動して上昇か

9月は消費の端境期で、相場は弱もちあいで推移した。これからは、秋の行楽需要や気温の低下にともなう鍋物商材の活発化などで、相場は全体的に上向くことが予想される。

【乳去勢】9月の大阪市場乳去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3が1091円、B2が1004円(前年同月比103%)となった。B2は前月に比べ15円上げた(B3は、前月・前年同月上場なし)。

農畜産業振興機構は、10月の乳牛(雌含む)の全国出荷頭数が3万900頭(同98%)で減少が続くと見込んでいる。10月の輸入量は総量で4万5800t(同111%)の予測。うち冷蔵品は、米国の輸入量の増加が見込まれることから、2万2100t(同126%)と前年同月を大幅に上回り、冷凍品は在庫を調整する動きもみられ、2万3700t(同100%)と前年並みを見込んでいる。

【F1去勢】9月の東京市場交雑種(F1)去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3が1450円(前年同月比86%)、B2は1163円(同77%)となった。前月に比べ、それぞれ28円、7円上げた。

同機構は、10月の交雑種(雌含む)の全国出荷頭数を2万500頭(同106%)と引き続き増加を見込んでいる。

【和去勢】9月の東京市場和去勢牛税込み平均枝肉単価は、A4が2418円(前年同月比95%)、A3は2022円(同

85%)となった。前月に比べA4は57円上げ、A3は46円下げた。3等級は軟調で4等級との価格差が広がった。

同機構は、10月の和牛(雌含む)の全国出荷頭数を3万7300頭(同103%)と、飼養頭数が回復傾向にあることも影響し、前年を上回ると見込んでいる。全体の出荷頭数は9万200頭(同102%)としている。

焼き肉需要が減る一方、鍋物需要が高まる。秋の行楽需要のほか、イベントが多い時期となることから、業務用需要の高まりが期待できる。和牛の引き合いが強まるが見込まれ、交雑種の相場も品質の良いものは連動して上昇することが予想される。和牛、交雑種とも同一等級で品質による価格差が大きい状況が続くとみられる。

乳去勢牛は出荷頭数が減少している。輸入冷蔵品が増加傾向となっているが、相場は横ばいで推移すると予想される。

このようなことから、向こう1ヵ月の大阪市場の税込み平均枝肉単価は、乳去勢B2が1000~1050円、東京市場の同枝肉単価は、F1去勢B3が1450~1550円、B2は1150~1250円、和去勢A4が2400~2500円、A3は2000~2100円での相場展開か。

## 需要の高まりに期待

### 9月の子牛取引状況

(単位:頭、kg)

ブロック名	品種	頭数		重量		1頭当たり金額		単価/kg	
		当月	前月	当月	前月	当月	前月	当月	前月
北海道	乳去	677	620	293	296	235,991	231,646	805	783
	F1去	1,019	723	320	324	398,569	402,376	1,246	1,242
	和去	1,322	1,155	313	316	802,889	796,438	2,565	2,520
東北	乳去	20	-	286	-	201,474	-	705	-
	F1去	5	27	318	295	360,072	390,280	1,133	1,324
	和去	1,633	1,744	307	307	799,292	785,448	2,600	2,558
関東	乳去	10	16	197	247	142,992	112,725	726	457
	F1去	136	174	305	310	380,382	406,595	1,247	1,312
	和去	654	935	266	261	756,328	731,112	2,846	2,802
北陸	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F1去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	44	2	301	141	849,469	475,200	2,822	3,370
東海	乳去	17	14	287	291	219,303	248,014	764	852
	F1去	115	76	307	307	387,213	411,977	1,261	1,341
	和去	445	245	269	255	804,442	803,118	2,990	3,152
近畿	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F1去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	361	187	267	262	935,635	948,494	3,506	3,620
中国	乳去	66	85	276	274	193,876	204,945	702	749
	F1去	194	212	305	304	418,656	422,249	1,372	1,391
	和去	206	753	282	282	765,017	745,195	2,711	2,642
九州・沖縄	乳去	4	38	290	260	211,680	196,361	731	756
	F1去	146	471	305	307	401,960	410,235	1,318	1,337
	和去	7,559	6,951	289	285	789,498	784,045	2,728	2,753
全国	乳去	794	773	290	290	229,970	224,810	793	775
	F1去	1,615	1,683	314	314	398,829	407,754	1,270	1,299
	和去	12,224	11,972	292	288	795,143	782,039	2,723	2,715

注) (独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。-は上場がなかったことを示す。関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

## 飼料米畜産物 国産で安心、約10%増 「割高でも購入」過去最高

日本政策金融公庫の調査(4面に掲載)によると、飼料用米による畜産物の購入理由で「安心」が過去3回の同調査で最高になった。

飼料用米で育てた畜産物及びその加工品を購入(外食を含む)した経験があるか聞いたところ(複数回答)、「購入したことがある」12.4%と前回(15年7月)よりわずかに上昇した。

購入した理由を聞いたところ、「国産で安心できる」が59.5%で10.6%上昇し、同調査で最高となった。次いで「味が良さそう」47.8%、「健康に良さそう」41.3%だった。購入した印象を聞いたところ(同)、価格は「適当」53.4%ともっとも高くなった。一方、「高い」は44.9%となり、前回より3.1%低下した。

購入したことのある畜産物の種類を品目別に聞いたところ(同)、「豚肉(加工品を含む)」57.1%とも

とも高かった。次いで「牛肉(同)」46.6%、「鶏肉(同)」28.3%となった。

今後の購入意向について聞いたところ、「購入したい」85.9%と前回より1.5%低下したものの、依然として高い傾向がみられた。内訳をみると「積極的に購入したい」7.3%、「おいしければ購入したい」17.4%などが上昇。一方、「価格次第では購入したい」37.2%と低下した。

従来品と比べてどの程度の割高なら購入するか(価格許容度)を聞いたところ、「割高でも購入したい」が全体で51.5%と、これまでの調査で最高になった。内訳をみると「1割高」までが29.6%ともっとも高かった。次いで「2割」までが15.1%、「3割高」までが4.2%と続いた。「価格次第では購入したい」が低下していることと合わせると、価格以外の要素によって購入を判断する人が増えていることがうかがえた。

## 豚枝肉

出荷・輸入とも前年上回り、相場は弱含みか

9月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が610円(前年同月比118%)、中物は586円(同117%)となった。前月に比べ、それぞれ26円、20円下げたものの、前年同月を大きく上回っている。

上旬は全国出荷頭数が少なく高値だったが、中旬から増加傾向となり、相場は下降し、下旬の上物は500円台前半となった。

農水省食肉鶏卵課は、全国の肉豚出荷頭数を10月は144万1000頭(同105%、過去5年の同月平均比98%)、11月は148万3000頭(同101%、同103%)と、

両月とも前年に比べ増加を予測している。農畜産業振興機構は、10月の輸入量を総量で7万4200t(同106%)と予測。うち冷蔵品は、好調な需要を背景に過去5ヵ年平均を上回る3万800t(同108%)を、冷凍品は4万3400t(同105%)を見込んでいる。

例年、秋は出荷頭数が増加する。今年は、出荷頭数、輸入冷蔵品とも前年を上回る見通しのため、相場は弱含みになると予想される。ただ、鍋物需要が強まってくるなど、消費は底堅いと見込まれ、大きな下げはないものとみられる。

向こう1ヵ月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が560~580円、中物は500~530円での相場展開か。

## 素牛 スモール

乳素牛、枝肉相場が上向き引き合い強まるか

【乳素牛】9月の素牛価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は、乳去勢が22万9970円(前年同月比116%)、F1去勢は39万8829円(同86%)となった。前月に比べ、乳去勢は5160円上げ、F1去勢は8925円下げた。F1去勢は、枝肉相場が弱もちあいで推移していることから、5ヵ月連続で前月を下回った。

素牛不足が続いている中、枝肉相場が上向く時期となるため、引き合いが強まるか。

【スモール】9月の全国主要23市場の1頭当たり税込み平均価格(農畜産業振興機構・速報値)は、乳雄が9万

2425円(前年同月比106%)、F1(雄雌平均)は23万817円(同90%)となった。前月に比べ、それぞれ4603円、1万7972円下げた。乳雄は3ヵ月、F1は5ヵ月連続で前月を下回った。F1は前月に続き、下げ幅が大きかった。

両品種とも取引頭数は前年を下回って推移しており、今後は小戻す展開となるか。

【和子牛】9月の和牛去勢価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は79万5143円(前年同月比92%)となり、前月に比べ1万3104円上げた。1月から8ヵ月連続で前月を下回ってきたが、ようやく下げ止まった。

枝肉相場は軟調が続いてきたが、今後は上向く時期となる。需給が引き締まり、もちあいの展開となるか。